移住コンシェルジュ通信

移住者と地元住民から生まれたプロジェクト「道後オンセナート」

「ココロ潤う。おんな一人旅に人気の温泉地ランキング（楽天トラベル）」では4年連続で1位、「温泉総選挙2016女子旅部門」でも1位を獲得するなど、近年、道後温泉は「女子旅の聖地」として各メディアに取り上げられることも少なくない。かつては社員旅行や慰安旅行など団体の観光客がメインターゲットとされていたが、これらランキングに裏づけされるように以前に比べ利用客層に大きな変化が見られる。今回ご紹介する「道後オンセナート」もその立役者のひとつである。道後の新たな風として注目されているこのプロジェクトについて紐解いていきたい。

Uターンと地元住民によるアートプロジェクト

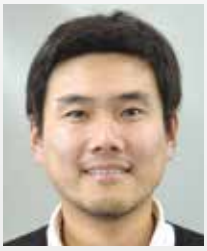
初年度「道後オンセナート2014」として開催されたこのプロジェクトは、そもそも道後温泉本館が改築120周年の大還暦を迎える記念としてスタート。当時、瀬戸内国際芸術祭や別府温泉など他県でのアートによる地域活性化の事例が活発になっており、一部の道後関係者がそれらを見聞きすることで、大還暦イベントをアートで盛り上げられないかというアイデアに繋がっていく。

その後、松山市や道後温泉旅館協同組合や道後商店街振興組合、大学の教授などから構成される道後温泉本館改築120周年記念事業実行委員会が立ち上がり、アート事業での実績を持つ東京の会社と協力しながらグランドデザインを描いていった。しかしこの事業は、「地域を育てる」「地元を盛り上げる人材の育成」という側面もあったため、実際の運営などは県外の組織ではなく地元人材の起用にこだわった。そして、イベント企画や建築、編集者などの地元クリエイター、地元NPO団体からなる「道後アートプロジェクト」が地元サイドの運営を担うこととなった。この「道後アートプロジェクト」の中心人物の多くはUIターン移住者。地元のいい面・悪い面もより俯瞰して見ることのできる「よそ者目線」で、道後の地元住民とコラボレーションを進めていった。

そして、「アートにのぼせろ」というコンセプトを掲げ、いよいよ道後

蜷川美花　「道後温泉本館インスタレーション」道後オンセナート2018より
©mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery/Dogo Onsenart 2018

高橋匡太
「ひかりの実」道後オンセナート2014、道後アート2015、道後アート2016、道後オンセナート2018より



えひめ移住コンシェルジュ
板垣　義男

オンセナートプロジェクトが動き出すこととなる。しかしこの時点ですでにいくつもの課題が山積していた。まずは道後という立地は空きテナントが少ないため作品の設置場所に頭を悩ませた。また、敷居が高く伝統を重んじる保守的なイメージもある。そこでプロジェクトのメンバーたちは道後に足しげく通い、道後の方たちとの対話に多くの時間を費やした。そんな彼らの行動力と熱い思いにより、当初疑心暗鬼だった道後のキーパーソンたちも心を動かされ、徐々に理解を示すようになった。

「#草間と蜷川」でバズった！道後を激震させたアートの力

このようにしてUIターンの若者たちと地域住民が協力し、ついに「道後オンセナート2014」が開催。オープニングイベントでは愛媛で初のプロジェクションマッピングや、地元の子ども達が参加できるイベントなども行われ、県内の方も多く訪れた。この地元住民も巻き込んだ一大イベントにより、愛媛県民にも道後オンセナートが広く知れ渡ったのである。

また、当初課題となった作品の設置場所問題は、逆転の発想により道後地区の9つのホテル・旅館に客室をアート作品化するプロジェクト「ホテルホリゾンタル」を生み出すきっかけとなった。見学のみならず実際に宿泊もできるというこのインスタレーションアートは、荒木経惟、草間彌生、谷川俊太郎など錚々たるアーティストが参加し人気を博した。なかでも、草間氏による『わが魂の記憶。そしてさまざまな幸福を求めて』（宝荘ホテル）は、SNSなどにより世界中に情報が拡散、国内のみならず欧米からの観光客も多く訪れるなど、世界的に大きな話題となった。

草間彌生
「わが魂の記憶。そしてさまざまな幸福を求めて」道後オンセナート2014より
©YAYOI KUSAMA Dogo Onsenart 2014 & HOTEL HORIZONTAL, All Rights Reserved

さらに翌年の『蜷川実花×道後温泉 道後アート2015』では、蜷川氏のオリジナル浴衣を着て道後歩きができるというプロジェクトを慣行。当時人気の読者モデルが自ら体験した画像をSNSで発信したことで火がつき、日本国内をはじめアジア系の観光客が多く訪れることとなった。

蜷川浴衣
「浴衣」道後アート2015より
©mika ninagawa,Courtesy of Tomio Koyama Gallery/Dogoart2015

これら話題づくりの裏側には、愛媛県出身である東京在住のプロジェクトメンバーを中心としたPR戦略も大きく影響した。プレスツアーやインフルエンサーの起用など、当時としては新しい取り組みが功を奏したのである。まさに関係人口も携わった愛媛の総合力がプロジェクトを成功に導いた。

「道後オンセナート2014」、2015・2016年の「道後アート」を経て、現在「道後オンセナート2018」が開催されている。今回は〈オマージュ〉（賛歌）をキーワードに、約25名のアーティスト作品が道後を盛り上げる。初年度のような大きな起爆剤はないが、長期的な視野を持つ成熟したアートプロジェクトとして進化し続けている。平成31年1月以降の状況が整った段階で道後温泉本館は営業しながらの保存修理工事を行う予定。今後追い風となりうる、更なる動きを期待したい。